

女子大学生および女子短期大学生における登校行動持続要因の 保有状況と居住環境の関連

Maintenance factor in school attendance and living-environment
among a women students of university and college

加藤 陽子

Akiko Kato

要 旨

本研究では、継続的に学校に通い続けられる学生に注目し、学生の適応状態の一つの指標となりうる「登校行動持続要因」の保有状況と居住環境との関連について検討することを目的とした。本研究の目的を検証すべく、私立4年制女子大学生および女子短期大学生351名を対象に、登校行動チェックリスト、居住形態、通学時間から構成された質問紙調査を実施した。

学校種や居住環境の違いによる登校行動持続要因を検討するため、*t*検定および分散分析による検討を行った。その結果、大学生・短期大学生ともに複数の登校行動持続要因を同時に保有しながら登校していること、資格取得や課題提出のためだけではなく「新しい知識を得るため」「成長したいから」など自己成長や自分の将来に役に立つと思えるか否かが登校行動を支えていることが明らかとなった。また、短期大学生は大学生に比べて有意に登校行動持続要因の保有数が少なかったことから、登校持続が難しく大学から離脱しやすいと考えられた。そのため、短期大学生の支援にあたっては、登校行動持続要因の数そのものを増やす支援が重要であるといえる。また、家族と別居している学生は、家族と同居している学生に比べて教育資源の利用を学校に通う理由と認識していた。さらに、通学時間が60分未満の学生はそれ以外の学生に比べて、教育資源の向上や大学内の居場所を登校行動持続要因として認識していた。これらのことから、家族と離れて暮らしている学生や通学時間が短い学生の登校行動を支援するには、教育資源の向上や校内交流を通じた居場所の獲得が重要であることが示唆された。

目 的

大学全入時代を迎え、学生の質の多様化が進むにつれて、対応の難しい学生や学生生活に何らかの問題を抱えている学生の増加が憂慮されている。実際、白石（2005）は、抑うつ傾向を示す学生の多さを踏まえて、治療対象とはいえないまでも、何らかの困難を抱えながら学生生活を送っているものが少なくないことを指摘している。

これまで学生の不適応に関する研究の多くは、スチューデント・アパシーや対人恐怖に代表されるような臨床心理学的援助を必要とする範疇の問題とされ、不適応になってからの援助方法や不適応の原因および発生のプロセスなどから検討がなされてきた（e.g., 下山, 1995；福田, 2000；白石, 2005；小塩・願興寺・桐山, 2007；外ノ池, 2007）。しかし、こうした研究は、学生の来談意欲に左右されがちで問題の早期発見・早期対応が困難であるという点において、大学独自のニーズに対応できているとはいえない（加藤, 2011）。近年になって、不適応予防の観点から大学生の初期適応に関する研究や不適応予防のための認知変容プログラムの検討などが行われているものの（e.g., 半澤2009；及川・坂本, 2008）、これらの研究は「なぜ不適応になるのか」といった問いからスタートしており、「なぜ不適応にならず、適応的に過ごせているのか」という疑問には答えていない。大学生の大半が学生生活に適応していることを勘案すると、適応的な学生に注目して彼らの資源を活用することは学生支援の新たな一側面を見出すことになるだろう。

ところで、一昔前の大学生は、授業よりも遊びやサークル活動、アルバイトに精を出しているものだと認識されていた。しかし、近年では授業に出席する学生が増え、大学生が「まじめ化」していることが指摘されている（浜島, 2006）。ベネッセコーポレーションが行った大学1～4年生計4070名を対象としたインターネット調査によれ

ば、授業への出席率は100%という回答が全体の41.0%を占め、ほぼ全出席に当たる90%以上の出席と答えた学生を含めると69.7%、80%以上では84.0%にもものぼることが明らかとなっている（十河, 2009）。こうした結果からは、多くの大学生にとって、大学は登校すべき場所であり、登校し続けることは特別なことではないといえるだろう。したがって、かつて一般的であった“とりあえず試験だけ受ければ単位が得られる”、“大学に通うか否かは本人の意思”といった考えはいまや過去のものとなり、多くの大学生が“できる限り大学には通学するものだ”と考えているといえる。

なお、同調査では、出席率が6割以下の学生が8.9%存在していた。欠席しがちな学生の多くは就職活動中の4年生であったが、それ以外の学生の中には、大学生生活あるいは学習への不適応、さらには留年、休・退学などにも発展しかねない要注意学生が含まれていた（十河, 2009）。もちろん大学生のライフスタイルは多様であり、大学生生活のほかにもアルバイトやサークル活動、ボランティア、ショッピング、恋人とのデートなど、様々な学外活動を行っているはずである。したがって、大学に通っていることが、すなわち学生の適応の指標のすべてであるわけではない。しかし、多くの学生にとって大学に通うことが一般的である今、「大学に通い続けられないこと」は学生の困難な状態を示す1つのシグナルになりうるだろう。不登校をきっかけとしたひきこもりなど、大学から離脱する学生が抱える問題は小さくない。また、社会に出る前に長期間にわたって不適応状態に陥ることは「学校から社会」へのスムーズな移行を困難にする可能性がある。これらを勘案すると、学生が「ひとまず大学に通い続ける」こと、そして大学に通うことによって学生支援の枠組みに入っておくことは、学生自身にとってもまた支援する側である大学にとっても重要なことだと考えられる。

そこで、本研究では、継続的に学校に通い続け

られる学生に注目し、学生の適応状態の一指標となりうる学校に通い続けられる要因（以下、登校行動持続要因）の保有状況について検討することを目的とする。登校行動持続要因の保有状況に関しては、加藤（2011）をもとに作成した登校行動持続要因チェックリストを使用する。加藤（2011）は、継続的に大学に通い続けている学生473名を対象に「大学に通い続けられる理由」について自由記述をもとめ、テキストマイニングによる対応分析を行った。その結果、「就職への手段」「役割を果たそうとする気持ち」「他者による支え」など10のクラスターを見出している。本研究では、それら10クラスターを参考に、心理学を専門とする研究者3名により内容的妥当性の検討を行った。その結果、登校行動持続要因のチェックリストとして40項目が抽出された。

なお、十河（2009）によれば、男子の平均出席率は85%であるのに対して、女子の平均出席率は89%となっており、女子のほうが男子よりも出席状況が良好であることが示されている。そこで、本研究では登校が持続されやすいと考えられる女子学生を対象とすることとした。また、神谷（2006）は短期大学生が大学生に比べて抑うつ傾向が強くなり、対応の難しい学生や不適応学生が増加していることを示唆していることから、学校種の違いが登校行動持続要因に影響するのかもしれないということについても検討する。さらに、福岡（2007）は家族からのサポートが大学生の精神的健康や授業への意欲に影響を及ぼすことを示していることから、家族との同別居や通学時間などの居住環境と登校行動持続要因との関連についてもあわせて検討する。

方法

調査対象者 調査対象者は、埼玉県内にある私立4年制女子大学および女子短期大学に在籍する学生である¹。調査協力が得られた455名のうち、回答漏れのなかった351名（平均年齢19.09、

$SD=0.94$ ）を分析対象とした。大学生と短期大学生の内訳は、大学生289名（平均年齢18.99、 $SD=0.76$ ）、短期大学生62名（平均年齢19.56、 $SD=1.47$ ）であった。

調査内容 (1) 居住形態：現在の居住形態について、「1. 家族と同居」「2. 1人暮らし」「3. 寮」「4. 友人・恋人と同居」の中からあてはまるものを1つ選択させた。(2) 通学時間：自宅から大学までの通学距離について分単位で記入させた。(3) 登校行動持続要因チェックリスト：登校行動に関する自由記述をテキストマイニングした結果（加藤，2011）をもとに抽出された40項目に対し、現在自分が登校を続けている理由として「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」までの5件法で回答を求めた。

調査時期と手続き 2010年12月上旬に大学・短期大学の授業時間の一部を利用して集団実施した。調査実施にあたっては、事前に授業担当教員に調査実施の承認を得たのち、調査対象者に対して本研究の趣旨について口頭および紙面にて説明した。また、得られたデータは個別に解析することなく統計的な処理を行うこと、質問紙は個人情報保護のため使用後は適正に処分されることなど、研究倫理に関する説明を行った。

結果

1. 登校行動持続要因の保有状況

はじめに、大学生および短期大学生の登校行動持続要因保有数について検討した。算出に際しては、登校行動持続要因チェックリストにおいて、「あてはまる」「ややあてはまる」を〈保有している=1点〉、「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」を〈保有していない=0点〉のように得点を補正した。その結果、本調査対象者は、最少4個～最多40個の登校行動持続要因を保有しており、平均して19.15個（ $SD=6.72$ ）の登校行動持続要因を保有していた。

登校行動持続要因として最も保有者が多かった

項目は「1.単位取得・進級・卒業のため」となり、96.3%の学生が保有していると回答していた。次いで、「34.自分が決めたことだから」が85.8%、「2.資格を取得するため」と「15.学費がもったいないから」がともに82.9%、「17.新しい知識を得るため」が80.3%で保有していた学生が多かった。なお、50%以上の学生が保有していた項目は、その他に「3.友達や恋人と話をするため」「4.行くのが当たり前だから」「6.興味のある授業があるから」「7.出席確認があるから」「8.勉強についていけなくなるのが怖いから」「9.提出物をだすため」「12.居場所があると感じているから」「14.親に迷惑をかけたくないから」「26.就職に役立つから」「29.色々な経験をしたいから」「35.成長したいから」「37.親に恩返しをしたいから」であった。反対に、「40.先輩や後輩に会うため」や「25.図書館で本を読むため」といった項目は、保有している学生数が少なく、それぞれ8.3%、9.1%と1割以下の学生しか保有していないことが明らかとなった (Table1)。

2. 学校種別の登校行動持続要因

次に、学校種(「大学」,「短期大学」)による違いを検討するために、登校行動持続要因チェックリストの登校行動持続要因保有数および各項目得点について t 検定を行った (Table2)。

その結果、登校行動持続要因の平均保有数は、「大学」が19.89個 ($SD=6.42$)、「短期大学」が15.73個 ($SD=7.09$) となり、短期大学生は大学生よりも登校行動持続要因保有数が有意に少ないことが明らかとなった ($t(349) = 4.54, p < .001$)。

また、各項目得点について検討した結果、「2.資格を取得するため」($t(349) = 7.22, p < .001$)、「3.友達や恋人と話をするため」($t(349) = 3.05, p < .01$)、「4.行くのが当たり前だから」($t(349) = 2.74, p < .01$)、「7.出席確認があるから」($t(349) = 2.67, p < .01$)、「8.勉強についていけなくなるのが怖いから」($t(349) = 4.67, p < .001$)、「9.提出物をだすため」($t(349) = 4.03, p < .001$)、「11.新しい人間

関係を作るため」($t(349) = 2.16, p < .05$)、「12.居場所があると感じているから」($t(349) = 2.58, p < .05$)、「14.親に迷惑をかけたくないから」($t(349) = 2.63, p < .05$)、「16.友達から取り残されるのが嫌だから」($t(349) = 4.68, p < .001$)、「17.新しい知識を得るため」($t(349) = 2.94, p < .01$)、「18.一人になりたくないから」($t(349) = 2.70, p < .01$)、「23.学校行事のため」($t(349) = 2.18, p < .05$)、「26.就職に役立つから」($t(349) = 4.21, p < .001$)、「29.色々な経験をしたいから」($t(349) = 2.33, p < .05$)、「30.苦勞して入った大学だから」($t(349) = 2.53, p < .05$)、「31.負けず嫌いだから」($t(349) = 2.20, p < .05$)、「32.クラスやチームの仲間に迷惑をかけたくないから」($t(349) = 4.06, p < .001$)、「33.塾やアルバイトなど学校外に心の支えがあるから」($t(349) = 2.21, p < .05$)、「34.自分が決めたことだから」($t(349) = 3.21, p < .01$)、「35.成長したいから」($t(349) = 3.92, p < .001$)、「36.この学校が好きだから」($t(349) = 2.05, p < .05$)、「37.親に恩返しをしたいから」($t(349) = 3.43, p < .001$) の24項目は、「大学」に比べて「短期大学」の得点が有意に低かった。このことから、短期大学生に比べて大学生は、これらの要因を大学に通う理由としてより認識しているといえるだろう。一方、「25.図書館で本を読むため」は、有意差が得られた項目の中で、唯一、「大学」に比べて「短期大学」の得点が有意に高かった ($t(349) = -3.66, p < .001$)。したがって、大学生は短期大学生に比べて図書館を利用することが大学に通う理由になっていないといえるだろう。

3. 居住環境別の登校行動持続要因

次に、調査対象者の351名の居住形態について検討した。家族と同居しているか否かを基準として算出した結果、「家族と同居」と答えた学生が323名、「家族と別居」(「2. 1人暮らし」「3. 寮」「4. 友人・恋人と同居」)と答えた学生が28名であった。また、通学時間について検討した。通学時間別に対象者を「60分未満」,「60~90分未満」,「90

Table1. 登校行動持続要因の保有状況と保有率

	保有状況		保有者数 N	保有率 (%)
	Mean	SD		
1. 単位・卒業・進学のため	4.74	(0.63)	338	(96.3%)
2. 資格を取得するため	4.34	(1.15)	291	(82.9%)
3. 友達や恋人と話をするため	3.80	(1.14)	252	(71.8%)
4. 行くのが当たり前だから	4.06	(1.13)	275	(78.3%)
5. 部活・サークル活動のため	1.88	(1.22)	48	(13.7%)
6. 興味のある授業があるから	3.70	(1.00)	241	(68.7%)
7. 出席確認があるから	4.05	(1.12)	277	(78.9%)
8. 勉強についていけなくなるのが怖いから	3.61	(1.26)	226	(64.4%)
9. 提出物を出すため	3.76	(1.13)	241	(68.7%)
10. 先生と話をするため	2.40	(1.07)	46	(13.1%)
11. 新しい人間関係を作るため	3.18	(1.19)	158	(45.0%)
12. 居場所があると感じているから	3.39	(1.15)	189	(53.8%)
13. 意地があるから	3.15	(1.29)	301	(44.4%)
14. 親に迷惑をかけたくないから	4.02	(1.00)	275	(78.3%)
15. 学費がもったいないから	4.16	(1.07)	291	(82.9%)
16. 友達から取り残されるのが嫌だから	3.12	(1.25)	143	(40.7%)
17. 新しい知識を得るため	4.05	(0.97)	282	(80.3%)
18. 一人になりたいから	2.82	(1.19)	105	(29.9%)
19. 励ましてくれる人がいるから	3.13	(1.20)	140	(39.9%)
20. 給食(学食)・食事が充実しているから	2.28	(1.11)	50	(14.1%)
21. 通学が楽だから	2.34	(1.26)	73	(20.8%)
22. 規則正しい生活のため	2.89	(1.28)	131	(37.3%)
23. 学校行事(学園祭や歓迎会)のため	2.26	(1.16)	52	(14.8%)
24. 端末室でパソコンをするため	2.13	(1.16)	50	(14.2%)
25. 図書館で本を読むため	1.88	(1.08)	32	(9.1%)
26. 就職に役立つから	3.96	(1.15)	257	(73.2%)
27. なんとなく	3.00	(1.39)	137	(39.0%)
28. 家にいたくないから	2.01	(1.13)	41	(11.7%)
29. 色々な経験をしたから	3.83	(1.09)	248	(70.7%)
30. 苦勞して入った学校だから	2.32	(1.21)	62	(17.7%)
31. 負けず嫌いだから	2.81	(1.31)	112	(31.9%)
32. クラス(授業を含む)やチームの仲間に迷惑をかけたくないから	2.88	(1.30)	128	(36.5%)
33. 塾やアルバイトなど学校外に心の支えがあるから	2.59	(1.25)	89	(25.4%)
34. 自分が決めたことだから	4.19	(0.96)	301	(85.8%)
35. 成長したいから	4.05	(1.00)	273	(77.8%)
36. この学校が好きだから	3.26	(1.19)	164	(46.7%)
37. 親に恩返しをしたいから	3.54	(1.14)	184	(52.4%)
38. 怒られるのが嫌だから	2.67	(1.26)	96	(27.4%)
39. 世間体が悪いから	2.66	(1.25)	94	(26.8%)
40. 先輩や後輩に会うため	1.83	(1.07)	29	(8.2%)

Table2. 学校種別にみた登校行動持続要因の基礎統計量と保有状況

	大学 (N=289)		短大 (N=62)		t値
	Mean	SD	Mean	SD	
1. 単位・卒業・進学のため	4.77	(0.58)	4.63	(0.81)	1.28
2. 資格を取得するため	4.60	(0.82)	3.11	(1.58)	7.22 ***
3. 友達や恋人と話をするため	3.90	(1.06)	3.34	(1.35)	3.05 **
4. 行くのが当たり前だから	4.14	(1.09)	3.71	(1.25)	2.74 **
5. 部活・サークル活動のため	1.92	(1.22)	1.71	(1.25)	1.21
6. 興味のある授業があるから	3.73	(0.97)	3.53	(1.16)	1.41
7. 出席確認があるから	4.12	(1.09)	3.71	(1.22)	2.67 **
8. 勉強についていけなくなるのが怖いから	3.75	(1.21)	2.95	(1.30)	4.67 ***
9. 提出物を出すため	3.87	(1.09)	3.24	(1.18)	4.03 ***
10. 先生と話をするため	2.37	(1.02)	2.52	(1.30)	-0.81
11. 新しい人間関係を作るため	3.25	(1.15)	2.89	(1.33)	2.16 *
12. 居場所があると感じているから	3.47	(1.09)	3.00	(1.34)	2.58 *
13. 意地があるから	3.20	(1.27)	2.90	(1.39)	1.65
14. 親に迷惑をかけたくないから	4.09	(0.95)	3.68	(1.16)	2.63 *
15. 学費がもったいないから	4.16	(1.08)	4.18	(1.02)	-0.12
16. 友達から取り残されるのが嫌だから	3.26	(1.20)	2.47	(1.25)	4.68 ***
17. 新しい知識を得るため	4.13	(0.91)	3.68	(1.14)	2.94 **
18. 一人になりたいから	2.90	(1.16)	2.45	(1.24)	2.70 **
19. 励ましてくれる人がいるから	3.17	(1.17)	2.90	(1.29)	1.62
20. 給食(学食)・食事が充実しているから	2.33	(1.12)	2.06	(1.08)	1.68 †
21. 通学が楽だから	2.30	(1.23)	2.48	(1.39)	-1.02
22. 規則正しい生活のため	2.89	(1.27)	2.94	(1.37)	-0.28
23. 学校行事(学園祭や歓迎会)のため	2.32	(1.17)	1.97	(1.07)	2.18 *
24. 端末室でパソコンをするため	2.12	(1.16)	2.21	(1.15)	-0.57
25. 図書館で本を読むため	1.77	(0.99)	2.40	(1.29)	-3.66 ***
26. 就職に役立つから	4.08	(1.09)	3.37	(1.23)	4.21 ***
27. なんとなく	2.96	(1.41)	3.21	(1.29)	-1.29
28. 家にいたくないから	2.00	(1.11)	2.05	(1.21)	-0.33
29. 色々な経験をしたから	3.90	(1.04)	3.50	(1.25)	2.33 *
30. 苦勞して入った学校だから	2.39	(1.22)	1.98	(1.12)	2.53 *
31. 負けず嫌いだから	2.89	(1.29)	2.48	(1.39)	2.20 *
32. クラス(授業を含む)やチームの仲間に迷惑をかけたくないから	3.01	(1.29)	2.29	(1.16)	4.06 ***
33. 塾やアルバイトなど学校外に心の支えがあるから	2.66	(1.23)	2.27	(1.31)	2.21 *
34. 自分が決めたことだから	4.28	(0.86)	3.74	(1.27)	3.21 **
35. 成長したいから	4.16	(0.89)	3.56	(1.30)	3.43 ***
36. この学校が好きだから	3.33	(1.18)	2.98	(1.21)	2.05 *
37. 親に恩返しをしたいから	3.64	(1.07)	3.03	(1.29)	3.92 ***
38. 怒られるのが嫌だから	2.70	(1.26)	2.52	(1.26)	1.04
39. 世間体が悪いから	2.66	(1.25)	2.65	(1.28)	0.11
40. 先輩や後輩に会うため	1.85	(1.06)	1.71	(1.09)	0.97

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table3. 学校種別にみた調査対象者の属性

		大学	短大	計
居住形態	家族と同居	20	8	28
	それ以外	269	54	323
通学時間	60分未満	88	24	112
	60～90分未満	126	21	147
	90分以上	75	17	92
N		289	62	351

分以上)の3群に分類した。その結果、「60分未満」と答えた学生が112名、「60～90分未満」と答えた学生が147名、「90分以上」と答えた学生が92名であった (Table3)。

まず、居住形態の違い (「家族と同居」, 「家族と別居」) による登校行動持続要因の保有状況を検討するために、登校行動持続要因チェックリストの登校行動持続要因保有数および各項目得点について t 検定を行った (Table4)。

その結果、登校行動持続要因の平均保有数は、「家族と同居」している学生が19.13個 ($SD=6.76$)、「家族と別居」が19.36個 ($SD=6.46$) となり、「家族と同居」している学生と「家族と別居」している学生の登校行動持続要因保有数に有意な差はみられなかった ($t(349)=0.17, n.s.$)。

次に、各項目得点について検討した結果、「21. 通学が楽だから」($t(349)=4.77, p<.001$)、「22. 規則正しい生活のため」($t(349)=2.79, p<.01$)、「24. 端末室でパソコンをするため」($t(349)=3.50, p<.001$)、「25. 図書館で本を読むため」($t(349)=2.65, p<.01$)、「28. 家にいたくないから」($t(349)=2.25, p<.05$) の5項目においてそれぞれ有意な差がみられた。これらの項目は、いずれも家族と別居している学生の方が同居している学生よりも得点が高かったことから、家族と離れて暮らす学生に特徴的な登校行動持続要因だと考えられた。

さらに、通学時間による違いを検討するために、通学時間3群 (「60分未満」, 「60～90分未満」, 「90分以上」) を独立変数とし、登校行動持続要因チェックリストの登校行動持続要因保有数および各項目得点を従属変数とした一元配置の分散分析

Table4. 居住別にみた登校行動持続要因の基礎統計量と保有状況

	家族と別居 (N=25)		家族と同居 (N=323)		t値
	Mean	SD	Mean	SD	
1. 単位・卒業・進学のため	4.71	(0.71)	4.75	(0.62)	-0.26
2. 資格を取得するため	4.18	(1.09)	4.35	(1.15)	-0.77
3. 友達や恋人と話をするため	3.75	(1.17)	3.80	(1.14)	-0.23
4. 行くのが当たり前だから	4.14	(1.11)	4.06	(1.13)	0.39
5. 部活・サークル活動のため	1.89	(1.10)	1.88	(1.23)	0.06
6. 興味のある授業があるから	3.46	(0.96)	3.72	(1.01)	-1.27
7. 出席確認があるから	4.21	(0.79)	4.04	(1.14)	0.80
8. 勉強についていけなくなるのが怖いから	3.61	(1.17)	3.61	(1.27)	-0.02
9. 提出物を出すため	3.54	(1.23)	3.78	(1.13)	-1.08
10. 先生と話をするため	2.71	(0.98)	2.37	(1.08)	1.63
11. 新しい人間関係を作るため	2.86	(1.01)	3.21	(1.21)	-1.75 †
12. 居場所があると感じているから	3.29	(1.05)	3.40	(1.16)	-0.49
13. 意地があるから	3.29	(1.18)	3.14	(1.30)	0.59
14. 親に迷惑をかけたくないから	4.04	(1.04)	4.02	(1.00)	0.10
15. 学費がもったいないから	4.07	(1.09)	4.17	(1.07)	-0.47
16. 友達から取り残されるのが嫌だから	3.14	(1.08)	3.12	(1.26)	0.09
17. 新しい知識を得るため	3.96	(0.88)	4.06	(0.97)	-0.50
18. 一人になりたいくないから	3.11	(1.17)	2.79	(1.19)	1.35
19. 励ましてくれる人がいるから	3.46	(1.04)	3.10	(1.21)	1.57
20. 給食(学食)・食事が充実しているから	2.57	(1.07)	2.25	(1.12)	1.45
21. 通学が楽だから	3.18	(0.94)	2.26	(1.26)	4.77 ***
22. 規則正しい生活のため	3.54	(1.10)	2.84	(1.28)	2.79 **
23. 学校行事(学園祭や歓迎会)のため	2.43	(0.96)	2.24	(1.17)	0.82
24. 端末室でパソコンをするため	2.86	(1.18)	2.07	(1.14)	3.50 ***
25. 図書館で本を読むため	2.39	(1.10)	1.84	(1.06)	2.65 **
26. 就職に役立つから	3.79	(0.92)	3.97	(1.16)	-0.82
27. なんとなく	3.43	(1.14)	2.97	(1.41)	1.69 †
28. 家にいたくないから	2.46	(0.92)	1.97	(1.14)	2.25 *
29. 色々な経験をしたいから	3.82	(1.06)	3.83	(1.09)	-0.02
30. 苦労して入った学校だから	2.50	(1.17)	2.30	(1.21)	0.84
31. 負けず嫌いだから	3.25	(1.32)	2.78	(1.31)	1.83 †
32. クラス(授業を含む)やチームの仲間に迷惑をかけたくないから	3.25	(0.97)	2.85	(1.32)	2.02 †
33. 塾やアルバイトなど学校外に心の支えがあるから	2.89	(0.99)	2.57	(1.27)	1.63
34. 自分が決めたことだから	4.21	(0.96)	4.19	(0.97)	0.15
35. 成長したいから	4.18	(0.94)	4.04	(1.00)	0.69
36. この学校が好きだから	3.36	(0.83)	3.26	(1.22)	0.59
37. 親に恩返しをしたいから	3.86	(1.11)	3.51	(1.13)	1.57
38. 怒られるのが嫌だから	2.96	(1.20)	2.64	(1.26)	1.31
39. 世間体が悪いから	2.79	(0.99)	2.65	(1.27)	0.67
40. 先輩や後輩に会うため	1.96	(0.96)	1.82	(1.08)	0.70

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Table5. 通学時間別にみた登校行動持続要因の基礎統計量と保有状況

	1.60分未満 (N=112)		2.60~90分未満 (N=25)		3.90分以上 (N=323)		F値	多重比較 (Tukey法)
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
1. 単位・卒業・進学のため	4.63	(0.76)	4.74	(0.61)	4.88	(0.44)	3.93 *	1>3
2. 資格を取得するため	4.22	(1.23)	4.33	(1.14)	4.49	(1.04)	1.36	
3. 友達や恋人と話をするため	3.75	(1.13)	3.79	(1.14)	3.87	(1.16)	0.29	
4. 行くのが当たり前だから	3.98	(1.18)	4.07	(1.08)	4.15	(1.14)	0.58	
5. 部活・サークル活動のため	1.95	(1.21)	1.86	(1.27)	1.84	(1.17)	0.25	
6. 興味のある授業があるから	3.72	(0.93)	3.76	(1.01)	3.57	(1.07)	1.08	
7. 出席確認があるから	3.90	(1.12)	4.14	(1.08)	4.09	(1.17)	1.54	
8. 勉強についていけなくなるのが怖いから	3.64	(1.15)	3.57	(1.34)	3.64	(1.29)	0.13	
9. 提出物を出すため	3.73	(1.09)	3.88	(1.10)	3.60	(1.23)	1.77	
10. 先生と話をするため	2.58	(1.08)	2.27	(1.05)	2.38	(1.08)	2.67 †	
11. 新しい人間関係を作るため	3.17	(1.12)	3.21	(1.20)	3.15	(1.27)	0.08	
12. 居場所があると感じているから	3.34	(1.11)	3.33	(1.14)	3.53	(1.20)	1.00	
13. 意地があるから	3.27	(1.17)	3.11	(1.32)	3.07	(1.38)	0.74	
14. 親に迷惑をかけたくないから	4.00	(1.00)	4.07	(0.98)	3.96	(1.04)	0.38	
15. 学費がもつたないから	4.09	(1.04)	4.16	(1.14)	4.25	(0.97)	0.57	
16. 友達から取り残されるのが嫌だから	3.18	(1.20)	3.10	(1.23)	3.10	(1.34)	0.17	
17. 新しい知識を得るため	4.14	(0.78)	3.97	(1.06)	4.08	(1.02)	1.11	
18. 一人になりたくないから	2.90	(1.13)	2.80	(1.21)	2.74	(1.21)	0.49	
19. 励ましてくれる人がいるから	3.26	(1.12)	3.10	(1.23)	3.00	(1.23)	1.23	
20. 給食(学食)・食事が充実しているから	2.41	(1.13)	2.18	(1.13)	2.28	(1.07)	1.40	
21. 通学が楽だから	3.13	(1.16)	2.25	(1.19)	1.51	(0.85)	55.15 ***	1>2>3
22. 規則正しい生活のため	3.39	(1.16)	2.71	(1.31)	2.58	(1.22)	13.68 ***	1>2, 3
23. 学校行事(学園祭や歓迎会)のため	2.33	(1.04)	2.31	(1.27)	2.09	(1.09)	1.35	
24. 端末室でパソコンをするため	2.38	(1.16)	2.07	(1.19)	1.93	(1.06)	4.05 *	1>3
25. 図書館で本を読むため	2.10	(1.05)	1.80	(1.13)	1.75	(0.99)	3.47 *	1>3
26. 就職に役立つから	3.90	(1.07)	4.01	(1.19)	3.93	(1.17)	0.32	
27. なんとなく	3.16	(1.37)	3.09	(1.40)	2.67	(1.36)	3.63 *	1>3
28. 家にいたくないから	2.24	(1.11)	2.00	(1.16)	1.73	(1.04)	5.34 **	1>3
29. 色々な経験をしたいから	3.95	(0.98)	3.74	(1.17)	3.82	(1.07)	1.14	
30. 苦労して入った学校だから	2.59	(1.21)	2.24	(1.24)	2.11	(1.10)	4.61 *	1>3
31. 負けず嫌いだから	3.08	(1.28)	2.76	(1.27)	2.59	(1.38)	3.88 *	1>3
32. クラス(授業を含む)やチームの仲間に迷惑をかけたくないから	3.02	(1.22)	2.90	(1.33)	2.68	(1.32)	1.71	
33. 塾やアルバイトなど学校外に心の支えがあるから	2.80	(1.11)	2.56	(1.36)	2.39	(1.21)	2.85 †	
34. 自分が決めたことだから	4.13	(0.96)	4.27	(0.91)	4.13	(1.05)	0.96	
35. 成長したいから	4.12	(0.98)	4.06	(0.99)	3.97	(1.03)	0.57	
36. この学校が好きだから	3.36	(1.21)	3.19	(1.22)	3.27	(1.14)	0.62	
37. 親に恩返しをしたいから	3.60	(1.15)	3.47	(1.17)	3.57	(1.06)	0.45	
38. 怒られるのが嫌だから	2.81	(1.20)	2.61	(1.22)	2.58	(1.37)	1.13	
39. 世間体が悪いから	2.81	(1.22)	2.59	(1.27)	2.60	(1.27)	1.21	
40. 先輩や後輩に会うため	1.97	(1.02)	1.75	(1.10)	1.78	(1.07)	1.53	

† p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001

を行った (Table5)。

その結果、登校行動持続要因の平均保有数は、「60分未満」が19.82個 ($SD=6.62$)、「60分～90分未満」が19.16個 ($SD=6.95$)、「90分以上」が18.32個 ($SD=6.44$) となり、3群間に有意な差はみられなかった ($F(349)=1.27, n.s.$)。

次に、各項目得点について検討した結果、「1.単位・卒業・進学のため」($F(349)=3.93, p<.05$)、「21.通学が楽だから」($F(349)=55.15, p<.001$)、「22.規則正しい生活のため」($F(349)=13.68, p<.001$)、「24.端末室でパソコンをするため」($F(349)=4.05, p<.05$)、「25.図書館で本を読むため」($F(349)=3.47, p<.05$)、「27.なんとなく」($F(349)=3.63, p<.01$)、「28.家にいたくないから」($F(349)=5.34, p<.01$)、「30.苦勞して入った大学だから」($F(349)=4.61, p<.05$)、「31.負けず嫌いだから」($F(349)=3.88, p<.05$) の9項目においてそれぞれ有意な差がみられた。そこで、Turkey法(5%水準)を用いた多重比較を行った結果、「1.単位・卒業・進学のため」、「24.端末室でパソコンをするため」、「25.図書館で本を読むため」、「27.なんとなく」、「28.家にいたくないから」、「30.苦勞して入った大学だから」、「31.負けず嫌いだから」の7項目は、いずれも「60分未満」群が「90分以上」群に比べて有意に得点が高かった。また、「21.通学が楽だから」に関しては、「60分未満」群が「60～90分未満」群・「90分以上」群に比べて有意に得点が高く、「60～90分未満」群は「90分以上」群に比べて有意に得点が高かった。「22.規則正しい生活のため」に関しては、「60分未満」群が「60～90分未満」群・「90分以上」群に比べて有意に得点が高かった。したがって、通学時間が短い学生ほどこれらの要因を大学に通う理由として認識しているということが明らかとなった。

考 察

本研究では、女子大学生および女子短期大学生の登校行動持続要因の保有状況を検討すること、

また学校種および居住環境によって登校行動持続要因の保有状況に差が生じるのかどうかを検討することを目的とした。

1. 登校行動持続要因の保有状況

まず、登校行動持続要因の保有状況について検討した結果、登校行動持続要因の平均保有数は19.15個であり、最も少ない学生でも4つの登校行動持続要因を保持していた。したがって、大学生、短期大学生ともに複数の登校行動持続要因を同時に保有しながら登校していることが明らかとなった。次に、登校行動持続要因の各項目について保有者が多かった割合を検討した。その結果、「1.単位取得・進級・卒業のため」や「2.資格を取得するため」、「7.出席確認があるから」、「9.提出物をだすため」、「26.就職に役立つから」など目的を遂げるための手段的な持続要因だけでなく、「6.興味のある授業があるから」や「17.新しい知識を得るため」、「29.色々な経験をしたいから」、「35.成長したいから」など自分の成長を期待するような持続要因も保有者が多いことが明らかとなった。つまり、外的な報酬や課題のためだけではなく、大学に通うことが自己成長や自分の将来に役立つと思えることが、登校行動を支える重要な要因だといえるだろう。庄司・對馬・中井・橋本(2008)は、大学に登校する理由に授業の魅力や価値を挙げた学生は学校適応感が高く、反対にそれらに不満を持っている学生は精神的健康度が低いことを指摘している。こうした指摘を勘案すれば、大学に通うことを自己成長に繋がると意味づけられるようにすることは、学生の登校行動を持続させるだけでなく、学生のメンタルヘルスを考える上でも重要だといえるだろう。

他方、「14.親に迷惑をかけたくないから」、「37.親に恩返しをしたいから」、「15.学費がもったいないから」など保護者対する気遣いや「8.勉強についていけなくなるのが怖いから」といった不安感から登校していると答えている学生も少なくなかった。加藤・菅野(2007)は、暗黙のプレッシャー

や不安感など、これまで登校を回避させると考えられてきた要因が、登校行動を持続させる要因になりうることを指摘したが、本研究の結果はこうした指摘を支持するものであり、登校という行動がポジティブな要因だけでなくネガティブな要因に支えられていることを証明するものだと言えるだろう。

2. 学校種別の登校行動持続要因の保有状況

次に、学校種別の保有状況を検討した結果、短期大学生は大学生に比べて有意に登校行動持続要因の保有数が少ないことが明らかとなった。また、24項目で短期大学生は大学生よりも有意に得点が低く、短期大学生は大学生に比べてそれらを大学に通う理由として認識していないことが示された。小林・小林・久保・園田・森（2004）は、学校不適応や学業不振と関連が強いことで知られる抑うつ傾向について取り上げ、短期大学生は大学生に比べて抑うつ度が強いことを指摘している。そもそも、短期大学生は大学生に比べて短い期間で多くの単位を取得しなければならず、また入学後半年もたたないうちから就職活動が始まるなど、非常にあわただしい学生生活を送っている。そのため、短期大学生は大学生よりも必然的に疲弊しやすく、抑うつ傾向を持ちやすい（石川，2002）。こうした抑うつ傾向の高さは、少なからず短期大学生の登校行動持続要因の保有状況の少なさと関連があるだろう。なお、登校行動持続要因が少ないということは、柱が少ない建物と同じように1つ1つの要因にかかる負荷が大きく、より不安定な状態にあるといえる。つまり、短期大学生は、複数の登校行動持続要因に支えられている大学生よりも登校の持続が難しく、大学から離脱する可能性も高くなるといえるだろう。したがって、短期大学生の支援にあたっては、1つ1つの登校行動持続要因を強化するだけでなく、登校行動持続要因の数そのものを増やすといった視点からの支援も行われるべきだろう。

ところで、大学と短期大学で大きな得点差が

あった項目のうち、「2.資格を取得するため」、「26.就職に役立つから」については、大学の教育内容と関連があると考えられる。調査対象とした大学は短期大学に比べて、取得可能な資格が複数個あり、またそれらの資格が直接職業に結びつく。そのため、大学生のほうがこうした手段的な登校行動持続要因と結びつきやすかったのだろう。ただし、同じく大学と短期大学で大きな得点差があった項目には、「8.勉強についていけなくなるのが怖いから」、「16.友達から取り残されるのが嫌だから」、「32.クラスやチームの仲間に迷惑をかけたくないから」などがあり、資格取得のための勉強や学友とのライバル関係が学生のプレッシャーとなっていることもうかがわれた。この結果は、岡田（2002）が指摘するように、心情的に近い他者との関係に不安を示す大学生の傾向を示唆しているだろう。ただし、大学生にとって、こうした友人関係は登校行動を阻害するというよりは、むしろ登校行動を持続させる方向に機能することもあるといえよう。

3. 居住環境別の登校行動持続要因の保有状況

さらに、居住環境別の登校行動持続要因の保有状況を検討するため、まず家族と同居しているか否かの違いによる登校行動持続要因の保有状況を検討した。その結果、家族と別居している学生は、同居している学生に比べて「21.通学が楽だから」、「22.規則正しい生活のため」、「24.端末室でパソコンをするため」、「25.図書館で本を読むため」、「28.家にいたくないから」の5項目において有意に得点が高かった。これらの項目は、いずれも家族と別居している学生の方が同居している学生よりも得点が高かったことから、家族と離れて暮らす学生にとって大学に通う理由として認識されやすい要因だといえるだろう。特に、「24.端末室でパソコンをするため」、「25.図書館で本を読むため」などは、学生の経済的背景との関連もうかがわれるものであり、家族と離れて暮らす学生の教育資源を大学が担っているとも考えられる。また、「28.

家にいたくないから」などは家族と離れた学生が、一人でいるよりも仲間や教員がいる大学を居場所としている様子が見受けられる結果となった。したがって、家族と離れて暮らす学生の支援を考える際には、大学の教育資源を充実させることや校内交流の機会を増やすことによって大学へのコミットメントを強めることが有効だといえるだろう。

また、通学時間（「60分未満」、「60～90分未満」、「90分以上」）の違いによる登校行動持続要因の保有状況を検討した。その結果、「1.単位・卒業・進学のため」、「24.端末室でパソコンをするため」、「25.図書館で本を読むため」を含む7項目で、いずれも「60分未満」群が「90分以上」群に比べて有意に得点が高く、「21.通学が楽だから」と「22.規則正しい生活のため」の2項目は「60分未満」群が「60～90分未満」群・「90分以上」群に比べて有意に得点が高かった。つまり、通学時間が60分未満であるほうがその他の群に比べて、これらの要因を学校に通う理由として認識し得やすいといえるだろう。ただし、通学時間別にみた登校行動持続要因の保有状況は、居住形態別の登校行動持続要因の保有状況と類似した結果となっていた。家族と別居している学生の多くは1人暮らしをしており、通学時間は家族と同居している学生に比べ短い。実際、本研究においても、家族と別居している学生のほとんどが60分未満で通学できる場所に住んでいた。そのため、通学時間の違いによる持続要因の保有状況が、単に通学時間のみを反映しているのか、居住形態の影響を受けた結果なのかははっきりとわからない。そのため、今後は居住形態と通学時間のどちらがより登校行動持続要因と関連が深いのかについて検討する必要があるだろう。

今後の課題

大学生生活において学生が困難な状況に陥った際に、周囲に助けを求められる学生は早めの対応と

適切なケアを受けやすい（吉武，2010）。しかし、周囲に助けを求めることが難しい学生は、周囲の気づきや対応が遅れやすく、問題がさらに深刻になる可能性が危惧される。「登校行動が持続していること」は、助けを求めたり周囲が気づくといった環境にいるという意味において、学生支援につながる重要な一側面である。そのため、本研究のように登校行動が持続する要因を検討することは、学生支援を考える上で非常に意義があることだろう。

今後の課題として、ここでは次の3点を指摘したい。1つ目は、調査対象の偏りが考えられる。本研究では、埼玉県にある4年制女子大学および同大学短期大学部を対象に分析を行った。そのため、本研究で有意な差が得られなかった登校行動持続要因であっても、調査対象を変更することで有意差が生じる可能性が考えられる。特に、中学生における登校行動持続要因において性差が見られることが報告されていることから（桂川・加藤・菅野，2009）、性差については検討の必要があるだろう。

2つ目は、本研究では登校行動持続要因と学校種および居住環境との関連性について検討を行ったが、登校行動持続要因と実際の登校行動（出席率）との関連については未だ検討の余地があるだろう。登校行動持続要因の量の多さが実際の登校行動に影響するのか、登校行動に密接に関連する鍵になるような登校行動持続要因があるのかなど、実際の行動指標との関連から、登校行動持続要因について検討することが今後の課題としてあげられる。

3つ目は、登校行動持続要因の保有状況について縦断データによる検討を行うことである。本研究では、学校種別、居住環境別など、属性別に登校行動持続要因の保有状況を検討した。しかし、1時点での横断データからの検討であったため、持続要因が時期ごとに変化するののかということについて言及することができていない。日本学生

支援機構学生相談部(2007)は、大学生活の課題として1年生を「初期適応」、2年生から3年生は「多様な模索」、4年生では「卒業に向けて」の各ステージに位置づけているが、登校行動持続要因も学生の抱える課題とともに変化する可能性がある。そのため、今後は縦断データを用いることにより、登校行動持続要因の保有状況の時間的変化について確認する必要があるだろう。

引用文献

- 福田真也(2000). 大学生の引きこもりと心身症(大学生のメンタルヘルスと心身症). 心身医学, 40(3), 199-205.
- 福岡欣治(2007). 大学新入生のソーシャル・サポートと心理的適応: 自己充實的達成動機の媒介的影響. 静岡文化芸術大学研究紀要, 8, 69-77.
- 大学生の引きこもりと心身症(大学生のメンタルヘルスと心身症). 心身医学, 40(3), 199-205.
- 浜島幸司(2006). 「若者の道徳意識は衰退したのか」浅野智彦編『検証・若者の変貌』勁草書房, 191-230.
- 半澤礼之(2004). 大学生の学業に対するリアリティショックと学業・授業意欲低下の関連—Locus of controlの高低に応じた関連の違いの検討—. 共愛学園前橋国際大学論集, 9, 27-37.
- 石川雅健(2002). UPI(精神健康調査)からみた現代女子短大生のパーソナリティ. 東海女子大学紀要, 22, 75-79.
- 神谷かつ江(2006). 学生相談室からみた現代の女子短期大学生の特性. 東海女子短期大学紀要, 32, 33-40.
- 加藤陽子(2011). 大学生における「学校に通い続ける理由」の構造—テキストマイニングを用いた検討—. 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 8, 173-185.
- 加藤陽子・菅野純(2007). 登校行動持続要因の検討(3): 「否定的な要因」の再分析を通して. 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 717.
- 桂川泰典・加藤陽子・菅野純(2008). 「精神的充足・社会的適応力」評価尺度(KJQ)と登校行動持続要因の関連(2). 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 37.
- 小林幸太・小林玲子・久保清・園田智子・森満(2004). 抑うつ症状とその関連要因についての検討 北海道内の一短期大学における調査から. 日本公衆衛生雑誌, 52(1), 55-65.
- 日本学生支援機構学生相談部(2007). 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」—(要旨). 大学と学生, 44, 47-54.
- 及川恵・坂本真士(2008). 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ—授業の場を活用した抑うつへの一次予防プログラムの改訂と効果の検討—. 京都大学高等教育研究, 14, 145-156.
- 岡田努(2002). 現代大学生の「ふれあい恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察. 性格心理学研究, 10, 69-84.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子(2007). 大学退学者におけるUPI得点の特徴. 学生相談研究, 28(2), 134-142.
- 下山晴彦(1995). 男子大学生の無気力の研究. 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 白石智子(2005). 大学生の抑うつ傾向に対する心理的介入の実践研究: 認知療法による抑うつ感軽減・予防プログラムの効果に関する一考察. 教育心理学研究, 53, 252-262.
- 庄司一子・對馬沙苗・中井大輔・橋本多恵(2008). 大学生の登校意識—登校理由・欠席理由とメンタルヘルスとの関連—. 日本教育心理学会第50回総会論文集, 454.
- 十河直幸(2009). 大学生活について—大学生の生活実態—. ベネッセコーポレーション研究所報, 51, 58-63.
- 外ノ池裕美(2007). 自己臭恐怖症の学生への援助. 学生相談研究, 28(1), 27-37.
- 吉武清實(2010). 学生相談の近年の傾向と課題. 大学と学生, 84, 6-12.

付記

本研究は、平成21年度～22年度科学研究補助金（若手（B））「大学・短期大学における学校不適応予防アプローチ探究のための実証研究」（研究代表者：加藤陽子，課題番号21730523）の助成を受けて行われた。

-
- ⁱ 4年制大学は保育，家政，心理系の学科から構成されており，対象者の半数は国家資格取得を目指していると考えられる。また，短期大学は文学・語学系の学科であり，一般就職率が高い。